

巻 頭 言

近未来に開かれた大学図書館

今、本の世界に革命が起こっている。昨年来、日本でも電子書籍が本格的に刊行され始めたことだ。書籍、雑誌上の文章、図や表の掲載されたページが電子化されて配信されているだけでなく、その文章にリンクした内容を動く映像で観て、文章の発声や音楽が聴ける。また、そのページに各自がメモを書き込んだり、通信機能を使って読者同士で意見交換もできる。これらは学生の学習にはかなり役立つと思われる。また、視覚障がいのある方に、より多くの読書の機会をもってもらえることにもなる。このような電子書籍が普及しても、従来の紙媒体がなくなるということは将来ともありえないが、今後こうした動きは世界的に広がっていくだろう。

本学図書館では、学術雑誌の電子配信に積極的に取り組んできたが、学術書については今のところ日本では電子化がまだほとんどされていないため、電子書籍には積極的に対応していない。他大学でも同様である。また、国際的に進められているプラットフォームの一元化は、情報市場主義経済に押されて、出版表現の自由に制限を生む恐れもあるので、我々としては慎重にならざるをえない。

一方、文部科学省は教科書の電子化を進める意向で、国会図書館も所蔵資料の電子化とその公開を始めている。本学図書館としては、これらの動きに常に気を配り、積極的に、しかし慎重に対応していきたいと思う。

そして、この流れとは別に、従来から本学図書館では、所属する教員・大学院生の論文を機関リポジトリとして公開し、さらに所蔵する貴重な史料・書物をデジタル化し、世界に公開していくことに積極的に取り組んできた。この電子化は今後とも、より懸命に進めていきたい。

ともかく大学図書館が学生、教員、市民の方々にサービスすべき原点は、進歩した電子システム自体ではなく、それを有効に使って学生の学習、先生方の教育、研究、地域の市民の方々により役にたつ資料、文献、情報を提供することにある。

この点では、たとえば「ラーニング・コモンズ」と呼ばれる新たな図書館サービスの構築が検討できる。ここでは、学生たちが複数の図書館蔵書、電子資料などをもちより、ともに討議したり、共同で課題解決にあたれるような空間と、それを指導できるアドバイザーが必要になる。いずれにせよもっとも大切なのは、単なる「箱づくり」ではなく、また電子システム自体でもなく、大学、大学院の講義と連携しながら、学生へアドバイスする人材とそれを育てる専門的な技能をそなえた図書館のスタッフである。

大学図書館長 奥野 卓司